

# 公立大学法人山口県立大学 附属 郷土文学資料センターだより

## 「鴻の峯学級」を閉じるにあたって

山本 満寿美 (鴻の峯学級)

四十五年間学んで来た「鴻の峯学級」を平成二十六年度で閉じるにあたって、そもそも、鴻の峯学級とは何？どんな学級？ということ、歴史を振り返りながら書き記してみようと思います。

昭和四十三年、山口市教育委員会と山口県立博物館との共催で「文化財と郷土の歴史を学ぶ婦人学級」が開かれました。大変好評で、そのまま続けて欲しいとの要望は、多くの人にその機会を作りたいとの主催者の意向で叶わず、それでは自分たちで作ろうと四十四年に生まれたのが、「鴻の峯婦人学級」です。



▲ 学級終了会の集合写真

“婦人”と名付けたばかりに女性ばかりの会となり、男女共同参加が叫ばれるようになると男性にも門戸を開くかと議論したこともありました。この学級は、指導者を置かず、すべてを自主運営の形をとってきましたので、偏見ですが、男性のとかく形式的

な堅い運営では、ふんわりして、ゆったりした今までの雰囲気なくなるのではということ、いつもその話題は消えていきました。

戦中、戦後の混乱期に青春を過ごした女性が、少し生活にもゆとりができ、満たされなかった学習意欲をかきたててくれるこのような学級を、自分たちの手で立ち上げるというその情熱は、心を同じくする女性が殺到という形で成就して、希望しても入れなく、二年も待たされたという人もいる位の人気学級でした。

自主運営ということは、経費もすべて自分たちで賄い、毎月講師を招いての講座、日帰り旅行、一泊旅行は世話をする学級長、班長、会計委員、旅行委員が計画し、講師の依頼等も自分たちでするわけで、当初は、学級長は二年、途中からスライド制（副級長を置く）を導入して一年交替になり、級長の負担も少し減りました。三十年を経たころより学級生の高齢化も進み、会員が減少し、山口ゆかりの名を付けた班が八班から六班、そしてこの二年間は四班となり、余りに少ない人数でお迎えするのは講師の先生に失礼だとのことで二十六年度の四十五年目をもって終了といたしました。



▲ 内田先生をかこんで。益田柿本神社にて（平成25年5月）

当初から、一度も絶えることなく、どんな無理も快く引き受けて下さったのが、今は体調を崩されて静養中の、内田伸先生です。私にとっては人形劇団“こっぺ”からのお付き合いの父とも兄とも言える方で、学級としては育ての親です。埋蔵文化財センターの中村徹也先生には退官されるまで講義を受けました。山口大学から旧萩国際大学学長になられた畑地正憲先生、県立大学元学長の岩田啓靖先生にも長年お世話になりました。学長室に伺って取り留めもなく楽しくお話伺ったこともありました。また、大寧寺へ貸し切りバスで精進料理を頂きに行ったのも楽しい思い出です。

最終年度は、山口県立大学から初めて木越俊介先生、シャルコフ・ロバート先生をお迎えして講義を受けました。とても新鮮で、前年度よりの山口大学の村田裕一先生、藤川哲先生が大変惜しんで下さったように、私たちが先生方にもっと早くにお会いしていたらと残念でなりません。

鴻の峯学級の幕はありますが、このような会が何処かでまた生まれますようにと期待しています。

## 山頭火ふるさと館建設に向けて

杉 江 純 一（防府市総合政策部文化・スポーツ課 山頭火ふるさと館建設室）

種田山頭火（たねださんとうか）は、明治15年12月3日、現在の防府市八王子二丁目に父竹治郎、母フサの長男として大地主の家に生まれました。

「分け入っても分け入っても青い山」などの、自由律俳句を詠んだ日本を代表する俳人として有名な山頭火は、昭和の芭蕉とも呼ばれており、その自由な生き方と自然な表現の句が現代人の心をつかんでいます。

こうした中、防府市では、「山頭火をうたい、山頭火にしたしみ、山頭火をつたえる、ふるさと館」を基本理念に掲げ、偉大な俳人山頭火を顕彰し、山頭火に親しみ、人々の交流を図るための施設として、平成29年10月「山頭火ふるさと館」の開館に向けて建設準備を進めているところです。

建設予定地は防府天満宮から萩往還を西側に徒歩数分の位置にあり、用地の北側は萩往還、南側は山頭火の小径（山頭火が生家から小学校まで通った道）に接しています。立地としては、防府天満宮、歴史館、まちの駅「うめてらす」といった観光施設に近く、種田山頭火生家跡、句碑、「山頭火の小径」といった山頭火ゆかりの場所をめぐる回遊拠点としてふさわしい場所であり、また、多くの観光客が訪れる防府天満宮などとの相乗効果による賑わいの創出も期待できる場所となっています。

現在、「山頭火ふるさと館」の基本設計中ですが、外観は隣接する宮市本陣兄部家や周辺の街並みと調和するよう、萩往還側は町屋風、南側は蔵のイメージで、また館内は、有料の展示室とは別に気軽に立ち寄っていただける無料の交流ゾーンを設置し、自由律俳句のファンが交流したり、俳句を創作できる場を設けるよう協議を進めています。

最後にこれはお願いですが、「山頭火ふるさと館」において、調査・研究及び展示等に活用する資料として、種田山頭火の遺墨、遺品や書簡を中心に、山頭火と関係の深い人物や防府ゆかりの文人などの資料も収集しています。このような資料について御存知であれば情報提供をしていただきますと幸いです。



▲ 山頭火ふるさと館のイメージパース



# やまぐち文学回廊構想推進協議会事務局を振り返って

山口県文化振興課 福田 美紀  
(現・山口県教育庁教職員課 管理主事)

御縁あって、平成 25・26 年度の 2 年間、やまぐち文学回廊構想推進協議会の事務局を務めさせていただきました。県庁出向以前まで勤務していた県立防府西高校で、国語科の副読本として『やまぐちの文学を辿る道』を採用したり、「おでかけ講座」に申し込んだりして、協議会にたいへんお世話になっていた自分が、協議会のお世話をする側に回るとは思いもしませんでした。今となってはたいへん得がたい経験をさせていただくことができた、この御縁めぐりあわせに感謝しています。

この 2 年間、協議会の主な事業として、「おでかけ講座」、「文学講座」、「文学散歩」、そしてパネルの作製等を行いました。

「おでかけ講座」は、2 年間計 11 箇所で開催しました。25 年度から、公益財団法人山口きらめき財団の負担金をいただいたこともあり、より多くの希望にお応えできるようになりました。2 年間で最も多く希望があったテーマは金子みすゞで、金子みすゞ記念館主任兼企画員の草場睦弘先生には 4 箇所も講師としてお出ましました。草場先生が、金子みすゞの生涯を丁寧伝えられながら、会場ごとに聞き手の心に寄り添うように話し方を工夫して下さったことが印象的でした。

「文学講座」は、県立山口図書館 2 階ふるさと山口文学ギャラリーでの企画展の関連イベントです。この 2 年間は、岩川隆、北森鴻、若月紫蘭、上田保といった 24 年度に「やまぐちの文学者たち」に新しく選定された文学者を中心に紹介してきましたが、26 年度には、幕末について描いた文学者のひとりとして、初期に選定された河上徹太郎をとりあげた講座も行いました。

「文学散歩」は、25 年度は下関市発着で山口市探訪（野村忠司先生のガイドによる東行庵の文学碑巡り、福田百合子先生の文学講座、香山公園・井上公園等の文学碑探訪、中原中也記念館鑑賞等）、26 年度は山口市発着で萩市探訪（大場洋先生のガイドによる井上剣花坊の句碑めぐり、加藤禎行先生の文学講座等）というバスツアーを行いました。いずれも多数のお申し込みをいただき、関心の高い方がたくさんいらっしゃることを実感しました。

さらに、市町別文学者タペストリー、まど・みちおの作品パネル、『層雲』の周防三羽ガラスと呼ばれた種田山頭火・久保白船・江良碧松の作品パネル、そして川柳中興の祖・井上剣花坊の句碑パネルなどの作製を行いました。成果物は主に県政資料館 1 階の「やまぐちの文化コーナー」で展示しています。一部は山口県総合芸術文化祭の会場でも展示しました。

これらの事業のために、協議会会員である記念館・顕彰会等、そして県立山口図書館の皆様方に多大な御協力をいただきました。また、文学者の御遺族、写真提供者、研究者といった方々にも大変お世話になりました。さまざまな御縁ができたことは私にとって貴重な財産です。この場をお借りして、お世話になった多くの方々に厚くお礼申し上げたいと思います。ありがとうございました。

参加者の皆様からもアンケートなどで「郷土にこんなすばらしい文学者がいることをもっと多くの人に知らせるべきだ」といった御感想をよくいただきました。文学作品・文学者が結んでくれる縁を、多くの方が求めておられることの現れだと感じています。これからも、やまぐち文学回廊構想を通じて、多くの人との御縁が結ばれていくことを期待したいと思います。

平成27年度の山口県立大学サテライトカレッジ「やまぐちの文学再発見」は、以下のプログラムで開催予定です。

会場：学びの森くすのき 時間：13：30～15：00 受講料 1,500円

回数	日 程	テ ー マ お よ び 講 座 内 容	講 師
1	5.23(土)	羊年の中原中也と明治維新	山口県立大学名誉教授 福田百合子
2	5.30(土)	国木田独歩の短篇小説を読む	当センター研究員 加藤 禎行
3	6. 6(土)	江戸時代の小説に描かれた大内氏	当センター研究員 木越 俊介
4	6.13(土)	鷺流狂言の世界	当センター所長 稲田 秀雄

寄贈図書 (2014年11月～2015年4月)

秋芳町地方文化研究会 復刻版『美禰郡細見絵圖』・金井道子『句集 言の葉』

寄贈雑誌 (2014年11月～2015年4月)

『文芸山口』第318～320号(山口県文芸懇話会)・『すばる』vol.49(すばる俳句会)・『其桃』第840～844号(其桃発行所)・『地橙孫新聞』第13号(兼崎地橙孫顕彰会)・『ふるさと紀行』第140号(ふるさと紀行編集部)・『あらつち』第697～698号(あらつち社)・『大内文化探訪』第23号(大内文化探訪会)・『山彦』第125～126号(山彦発行所)・『颯』第98号(颯文化会)・『ふるさと山口』第35号(山口の文化財を守る会)・『和海藻』第30号特別記念号(豊北郷土文化友の会)・『中原中也記念館館報』第20号(中原中也記念館)

編集後期

▼センターだより25号をお届けします。▼今号は、県下における様々な文学関係の活動について3本の記事をお届けします。▼まずは、長い年月にわたり地域の歴史・文学の学びの場として活動を続けてこられた鴻の峯学級について、学級の牽引役であられた山本満寿美氏にその歴史を記していただきました。惜しくも昨年度閉級はされましたが、各時間学級がいかに楽しく積極的な姿勢で学ばれていたかがよく伝わって参ります。鴻の峯学級は地域の日々の暮らしを彩り豊かにしたものと思います。▼つづいて、まさに今現在建設準備中の山頭火ふるさと館について、最新のご報告を開館に尽力されている杉江純一氏にお寄せいただきました。▼立地・建造物ともかなり具体的に計画が進んでおり、その充実ぶりが窺われます。氏の資料についての情報提供の呼びかけに、お心当たりのある方はぜひともご一報ください。▼最後に、山口県文化振興課で二年間、やまぐち文学回廊構想推進協議会事務局の任に当たられた福田美紀氏に、協議会の活動についてご報告いただきました。講座や文学散歩などを通して、文学とのふれあいが地域に根付いている様子がよく分かります。▼こうした活動には、当センターはもちろん、各顕彰会をはじめとする県下の団体や有志の方々との協力が欠かせません。今後もこうした絆を強めながら、いっそう郷土の文学への関心が高まることを願ってやみません。▼次号は本年2月に行われた鷺流狂言アメリカ公演の模様についてご報告する予定です。(K)



■編集発行：公立大学法人山口県立大学附属郷土文学資料センター (〒753-8502 山口市桜畠3-2-1)  
TEL. (083) 928-0211 FAX. (083) 928-2251  
■発行日：2015(平成27)年5月31日